

萌芽的共同研究（課題番号：30H-05）

課題名： 地域文化の理解と継承を目指した防災マップ作成に関する研究—四万十町興津地区を事例として—

研究代表者：岡田夏美

所属機関名：京都大学大学院情報学研究科

所内担当者名：矢守克也

研究期間：平成 30 年 4 月 1 日 ～ 平成 31 年 3 月 31 日

研究場所：高知県四万十町興津地区

共同研究参加者数：2 名（所外 名，所内 2 名）

- ・大学院生の参加状況：1 名（博士 1 名）（内数）
- ・大学院生の参加形態 [研究代表（資料収集，質問紙調査，現地における聞き取り調査，参与観察，分析結果の考察）]

研究及び教育への波及効果について

児童の地域の防災活動に対する主体性を構築するための基盤となる方向性を模索し，実践することができた．防災マップのあり方に関する視野を広げることができ，研究代表者の博士論文の各論を構成する重要なフィードバックが得られるという教育効果も得られた．

研究報告

(1) 目的・趣旨

地域社会が潜在的に持っているハザードのリスクを可視化するにあたって，防災マップは有用である．近年では，その防災マップを住民が主体的に作ることによって，防災への関心を高めようとする取り組みが増加している．しかし他方で，マップ作りが地域社会への愛着をかえって低減させ，その結果として防災の取り組みにも悪影響を及ぼす可能性がある．つまり，防災マップ作成には「いかに危険な場所を見つけるか」という意識がついてまわるため，マップ作成者の意識が地域の危険性だけに集中し，「こんな危険なまちに住みたくない」と考えてしまう場合がある．こうした防災マップ作成に付随する負の側面を軽減していくためには，マップ作りだけにとらわれず，より広く地域社会全体がもつ特徴に注目する必要がある．

これまで，研究代表者は，地域学習が防災活動にもたらす効果を，高知県四万十町興津地区を事例として研究してきた．その中で，災害リスクやそれに対する対処法について直接的に教えるだけでなく，地域に昔から根づく文化をも学習することが，ひいては防災活動への意欲につながることを見いだした(岡田・矢守(2017))．防災マップの作成が，防災活動に対して肯定的な効果を示す研究は存在するが，防災マップの成果と課題の両方を踏まえ，地域社会から学校防災教育を捉えようとする視点に立った研究はまだ少ない．

本研究の対象地である高知県四万十町興津地区は，防災マップを作成する→そこで発見されたまちの課題を改善する→さらに見直して，次の課題へとつなげるため，防災マップを作成する→…というサイクルが成立している地域である．こうした防災マップサイクルが成立している地域において，防災マップの作成を通して，作成者である児童が，地域の防災に対して主体性を持つことを目指してアクションリサーチを行った．

(2) 研究経過の概要

興津地区が抱える防災マップ作成の課題をふまえ，児童の防災活動への主体性構築という教育効果を見通しながら，防災マップのあり方に新たな視点を導入し，作成した．結果としてこれまではなかった，「児童がファシリテートしながら，保護者・地域住民と防災マップを囲んで，興津の歴史・文化交流や防災の現状を議論する」会を設けることができた．これは，本研究の当初の目的である．こうした実績を定着させるため，今後も，実情に合わせた手法を議論し，継続・実践していく．

(3) 研究成果の概要

興津地区では、10年以上毎年、小学生が防災マップを作成し、完成品は20枚を超えている。しかしながら、こうしたマップ作成は、学校や地域に有用な活動となる一方で、マンネリ化も招いてしまっている。学校防災教育の観点からは、防災マップを作成することだけでもよい学習になり得る。事実、同地区においては、そのマップが地域の防災事業に反映させられてきたが、さらに新たな展開が求められてきている。マンネリ化の課題を克服すべく、学校と地域を媒介するような防災マップの新たなあり方を模索し、学校教員との協議の結果、防災マップそのものの前提を捉え直し、「地域のことを盛り込んだマップ」ではなく、「地域（の人）と触れあうための媒体としてのマップ」づくりを目指した。学校と地域をつなぐためには、そのマップ自体が使用され続けられるものであることが求められる。その表現形態の一つとして、すごろくという手法を選択した。具体的には、興津地区の地図上で、実際の場所での現状がすごろくのマス目のイベントとして発生する仕組みとし、そのイベントは、児童のまち歩きからまとめられ、大きく3つのイベント属性に分類することができる。①興津地区の歴史・文化、②防災上、準備が整っていること、③防災上、準備が未だ整っていないことである。例えば、②には、「避難場所で簡易トイレが用意されていたので、トイレで困らなかった」というようなイベントが当てはまる。プラスのイベントであればコインをゲットすることができ、反対にマイナスのイベントであれば、コインは没収されるゲーム性を与えた。そして、「地域（の人）と触れあうための媒体としてのマップ」を実現するために、小学校が毎年開催している学習発表会において、すごろくマップで“遊ぶ”時間を設けることとなった。この“遊ぶ”ためのファシリテートを、作成者である児童に任せた。

結果として、保護者・地域住民24名と、児童22名、その他参加者5名の、約50名が一堂に会した、「防災すごろくマッププレイ会」が開催された。保護者・地域住民からは、「子供といっしょに学ぶことで、大人も勉強になります。これからはがんばって下さい。」「小学生も地域の人も一緒になってゲームをしたりして楽しむ機会はなかなかないので、明るい雰囲気です。防災学習ができて良かった。」「今までの防災学習発表会に比べ、より子供達が地域のリーダーになりつつあることを感じた。」「みんなでコミュニケーションをとって勉強が発見になったのすごく良かったです。」などのような感想が聞かれた。児童からは、「想像以上に楽しくできた。地域の人も改善できるところを深く考えてくれた。」「「楽しく学ぶ」という目的が伝わったと思う。」「地域の人の危ない所に対する意見が分かった。興津の詳しいことが分かった。」などの感想があった。自分たちがこだわって作成したマップを、作っていない人と一緒に囲みながら議論するためのファシリテートをすることで、児童には、地域の防災活動の一端でありスタート地点を担っているんだという地域防災活動への主体的な意識が醸成されることを期待したが、その成果は得られたと評価している。

今後も、引き続き、防災マップを、単なる「道具」ではなく、交流と交換の「道具」として位置づけ、防災マップが、実践そのものを構成していくようなアクションリサーチを行っていく。

(4) 研究成果の公表

- ・岡田夏美・矢守克也(2018), 学校での防災マップ作成が地域防災活動にもたらす効果—四万十町興津地区を事例として—, 第37回自然災害学会学術講演会 於仙台市中小企業活性化センター
- ・岡田夏美・矢守克也(2018), 児童の主体性の構築を目指した防災マップの作成に関する研究—四万十町興津地区を事例として—, 平成30年度京都大学防災研究所研究発表講演会 於京都大学防災研究所